

## 連 載

## 新興国ウォッチ！ &lt;第12回&gt;

## 低水準均衡の罠

多田 忠義

## 低水準均衡の罠とは

低水準均衡の罠（低位均衡の罠、Low-Level Equilibrium Trap）とは、1人当たり所得がひとたび高い均衡点を越えた水準にまで成長すれば経済は自律的な成長過程に乗るが、1人当たり所得水準が高水準の均衡点以下であれば低水準の均衡点に収束する力が働く、という考え方である。後発開発途上国（LDC）では、所得水準が低い一方で、人口増加率が高いために貯蓄能力も低く、十分な資本形成（物的・人的）が行われない。その結果低生産性状態から抜け出すことができず、所得水準は低いままにとどまってしまうため、経済は低い均衡点にとどまらざるを得ないとされ、「低水準均衡の罠」と呼ばれている。

前回取り上げた人口ボーナスでは、扶養人口比率の低下により経済成長が促されるとしたが、低水準均衡の罠では、所得や資本蓄積の状態も経済成長を考えるうえで必要不可欠であることを指摘する。

## 人口増加率と一人当たりGDP

図表は、一人当たりGDPと人口増加率との関係を時系列で示したものである。中国、インド、ブラジルといった新興国では、の部分、つまり人口増加率が0.5～1.5%に低下した段階で、急速に一人当たりのGDPが増加し始めたことが確認できる。中国やブラジルは人口増加率が低下するとともに、社会経済構造や制度を少しずつ変化させ、ある時点で高水準の均衡点へ移行したとみられる。一方、インドでは、まだ均衡点には達していないとみられ、社会・経済・政治制度の改革を通じて資本蓄積を図れるかどうか経済成長に必要であると考えられる。

低水準均衡の罠は、あくまでも低い所得水準から抜け出せない構造を示すものである。これを脱しても、さらなる社会経済制度の調整が進まなければ「中所得国の罠」に陥ることとなる。新興国の経済成長を分析する上では、こうした人口、資本蓄積、制度の観点が必要である。

